

情報理工学系大学生によるイベント型子ども食堂開催の試み

小池 温子¹⁾、黒谷 佳代^{2) 3)}、鈴木 美穂⁴⁾、大河原一憲⁴⁾

The attempt of an event-typed children's cafeteria (kodomo-shokudo) by university students who major in information science and technology

Atsuko KOIKE¹⁾, Kayo KUROTANI^{2) 3)}, Miho SUZUKI⁴⁾, Kazunori OHKAWARA⁴⁾

Abstract

OBJECTIVE : This report describes that university students who major in information science and technology organized children's cafeteria for elementary school students nearby own university. **METHODS :** Children's cafeteria events were held on September 2017 and 2018. The events consisted of sports recreation, tour of an Urban smart agriculture facility, and eating together with all attendees. Furthermore, consciousness survey of dietary lifestyle and dietary habits were conducted before and after the first event in the university students. **RESULTS :** Participants were totally about 140 people in 2017 and 130 people in 2018 including the university students, elementary school students and their family members. Taking advantage of the first event experience, the second event was improved in terms of an organization involving local stakeholders and event contents. As results of consciousness survey, the rates of interest in food education and entry of a local food event were increased after the first event. **CONCLUSIONS :** These events could provide a profit to both of the university students as organizers and elementary school students as participants. Further studies are needed to investigate the effect of our children's cafeteria on participated children.

Keywords : Regional Cooperation, Communal dining, Food education, shokuiku

1) 東京家政大学家政学部栄養学科

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

Department of Nutrition, Tokyo Kasei University, 1-18-1 Kaga, Itabashi-ku, 173-8602 Tokyo, Japan.

2) 国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所

国立健康・栄養研究所 栄養疫学・食育研究部

〒162-8636 東京都新宿区戸山 1-23-1

Department of Nutritional Epidemiology and Shokuiku, National Institute of Health and Nutrition, National Institutes of Biomedical Innovation, Health and Nutrition, 1-23-1 Toyama, Shinjuku-ku, 162-8636 Tokyo, Japan

3) 昭和女子大学生生活科学部

Department of Health Sciences, Showa Women's University, 1-7-57 Taishido, Setagaya-ku, 154-8533 Tokyo, Japan

4) 電気通信大学大学院情報理工学研究科

〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1

Graduate School of Informatics and Engineering, University of Electro-Communication, 1-5-1 Chofugaoka, Chofu, 182-8585 Tokyo, Japan

代表著者の通信先 : 大河原一憲 (Kazunori OHKAWARA) 電気通信大学大学院情報理工学研究科

〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1 Phone : 042-443-5584 Fax : 042-443-5590 E-mail : ohkawara_kazunori@e-one.uec.ac.jp

受付日 : 2020.4.20, 採択日 : 2020.7.17

1. 背景

現在、子どもたちに対し、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供する取り組みとして、「子ども食堂」が全国各地で開催されている¹⁾。また、この数年で子ども食堂の数は急増しており²⁾、現代社会に必要な市民活動として注目されている。活動の目的や形態は多岐にわたり、1) 困難を抱える子どもたちへの食支援、2) 地域住民の交流拠点¹⁾、3) 共食機会の提供、4) 調理や農作業などの体験機会の提供などが挙げられる³⁾。

情報理工学系大学である電気通信大学は、人口約12万人の東京都調布市に位置するが、市内において現在8か所程度の子どもの食堂が運営されている。その目的や運営方法は様々であるが、月1-2回のペースで継続的に開催されているケースが多い。市内でも子どもの食堂による支援活動が徐々に高まりをみせるなか、電気通信大学においても部活動および研究室ゼミが同じ大学生・大学院生を中心に子どもの食堂の立ち上げが進められた。発足の動機は大学生・大学院生として地域活動、地域貢献をしたという単純なものであったが、福祉医療学系や栄養学

系を専攻する地域貢献、食育への関心が高い学生ではなく、情報理工学系の学生が地域とのつながりを求めて始めたことは珍しい事例である。

初回のイベントを立ち上げるにあたり、情報理工学系大学生・大学院生がイベント型子ども食堂を実施する意義と目的について、社会福祉協議会職員や地域子ども食堂実施者等のステークホルダーとともに議論した。議論を通じて、イベント型の子どもの食堂では継続的な食支援にはならないものの、大学生・大学院生と地域住民との交流を通じたソーシャルキャピタルの醸成や子どもたちの将来の選択肢を広げるきっかけ作りができるという点で、他の子どもの食堂には無い意義を持って実施できるとの考えに至った。そこで本稿では、本イベントならではのアプローチによる地域貢献の達成を目的とし、情報理工学系大学生・大学院生が小学生を対象にイベント型子ども食堂を開催した事例を報告する。

プロジェクトの流れ

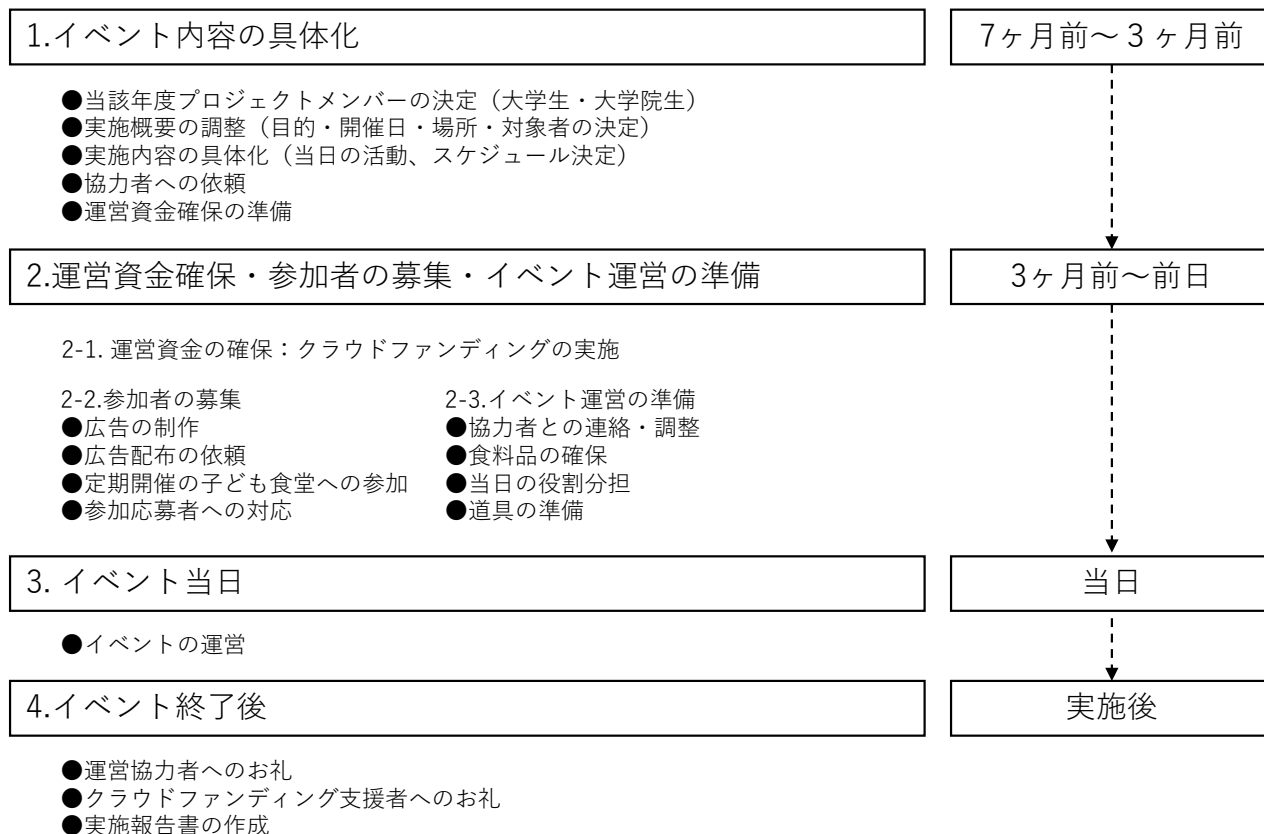


図1. プロジェクトの流れ

II. 方法

1. プロジェクトの概要

1) イベントの特徴と開催までの流れ

本イベントの特徴として、(1) 大学施設を利用したイベント形式による開催、(2) 大学生・大学院生が中心になって主催、(3) 小学生、大学生、保護者による異世代間交流、(4) 大学と地域との密な連携が挙げられる。プロジェクト遂行の流れは図1に示した⁴⁾。

2) 参加者および開催日時・場所

第1回目は平成29年9月9日、第2回目は平成30年9月8日に、両日とも電気通信大学にて行われた。参加者は各回ともに親子合わせて100名を募集し、近隣小学校や子ども食堂でチラシを配布して呼びかけを行なった。実際の参加人数は、実施者である大学生・大学院生が48名(第1回)と46名(第2回)、地域の小学生が約50名(第1回)と41名(第2回)、同伴の保護者らが約40名(第1回)と42名(第2回、うち未就学児童12名)であった。

3) 開催資金の調達

本イベントは、できるだけ多くの子ども達に参加してもらうため、無料で開催することを目標とした。第1回では実施者側が運営費を自己負担したが、第2回では地域密着型クラウドファンディングFAAVO東京調布・府中を通じて活動費用の支援を募った⁵⁾。

4) 提供食の確保

本イベントの食事提供は、電気通信大学生協食堂の協力のもとで行われた。食事内容は、カレーライス、サラダ、飲料であった。また、夕食時に行ったビンゴ大会の景品には、調布市社会福祉協議会が運営する市主催のフードドライブと市民団体であるフードバンク調布から提供を受けたお菓子を利用した。第2回においては、調布市に所在する株式会社スポルアップから、地元の野菜を使用したジェラート(小松菜味・ピーマン味)の提供を受けた。

5) 当日のプログラム

第1回の開催では、受付後に大学生と一緒にスポーツリクリエーション活動をしたのち、実施者・参加者全員で夕食を食べる構成となっていた。第2回の開催では、スポーツリクリエーション後に学内に設置されている都市型スマート農業の見学会を取り入れた。当日のプログラム内容を図2に示した。

イベントのスケジュール (第2回)



図2. イベントのスケジュール (第2回)

2. 食への関心の変化に関する調査 (実施者向け)

第1回開催時において、実施者を対象にイベント開催前後の食意識・食行動に関する調査を自記式調査票により行った⁶⁾。調査内容には、農林水産省が実施した食育に関する意識調査報告書の調査票から、食育への関心、現在の食生活、共食や孤食の状況の3項目を採用した。イベント前後の変化に対する有意差検定にはカイ二乗検定を施し、有意水準は5%とした。対象者には、調査の目的と結果の学術的使用について調査冒頭で十分な説明を行った。調査の同意は本人が質問紙に添付した同意書に同意の有無を記入することにより得た。本研究は、電気通信大学の倫理審査委員会の承認を得た(承認番号: 17026)。

III. 結果

1. 当日の様子

1) スポーツリクリエーション

本イベントのスポーツリクリエーションは、実施者の大学生・大学院生である電気通信大学大河原研究室および体育会アメリカンフットボール(アメフト)部のメンバーが中心となり、子ども達が安全かつ楽しく運動が出来るよう企画した。子ども達は、大学生によるアメフト実演の見学後、複数のチームに分かれて準備運動から始め、大学生と一緒にアメフトのボールを用いたミニゲームやキャッチボールなどをして遊んだ。子ども達は、普

段接する機会が少ない大学生・大学院生と話をしたり、思い切り体を動かしながら楽しんでいた。

2) 都市型スマート農業の見学(第2回のみ)

スポーツリクリエーション後は、電気通信大学佐藤証研究室が行なっている都市型スマート農業の見学会を行なった。子ども達は大学生・大学院生と共に屋上で野菜が育つ様子を観察し、実際に収穫、試食したりして、大学における研究を直に触れた。「これは何の野菜か」「この野菜は食べられるのか」などの質問を大学生・大学院生にするなど、見るものすべてに興味を示している様子であった。

3) 参加者全員での食事

電気通信大学大学生協食堂にて、大学生・大学院生、小学生、その保護者の全員で夕食をとった。親子や友達同士の間に大学生・大学院生が座り、世代を問わず会話をしながら食事を楽しんだ。子ども達が食事を終えた頃にビンゴ大会を行い、寄付されたお菓子を景品として贈呈した。子ども達はビンゴが当たると好きなお菓子を選び、嬉しそうに持ち帰った。また、株式会社スボルアッ

プの支援による野菜ジェラートを提供すると、子ども達はいつも食べている野菜が美味しいスイーツになったことに驚きながら、地元の野菜本来の甘みを味わっていた。

2. 食育イベント体験を通じた食への関心の変化に関する調査結果

本調査は、イベント実施者を対象に第1回のイベント開催時に行われた。回答者数は計43名であった。食への関心については、「食育に関心がある」と答えた人の割合がイベント前は67.5%であったが、イベント後には88.4%となり、統計的有意差は確認されなかったものの増加傾向にあった(図7-A)。また、地域等での共食に対して参加したいと思う人の割合についても、イベント前は25.6%であったものの、イベント後は58.2%になり、増加する傾向がみられた(図7-B)。さらに、「食育イベントを通じて、ご自身の食意識・食行動について感じたこと」、「参加した子どもたちの食環境、地域貢献について感じたこと」について自由記述を求めたところ、「共食の楽しさへの気付き」「地域貢献の大切さへの気付き」「食べ残しに対する気付き」の3点に対する回答が多くみられた。



図3. ボールを使ったリクリエーションの様子



図5. 参加者全員での食事の様子



図4. 都市型スマート農業の見学



図6. 当日の食事準備の様子

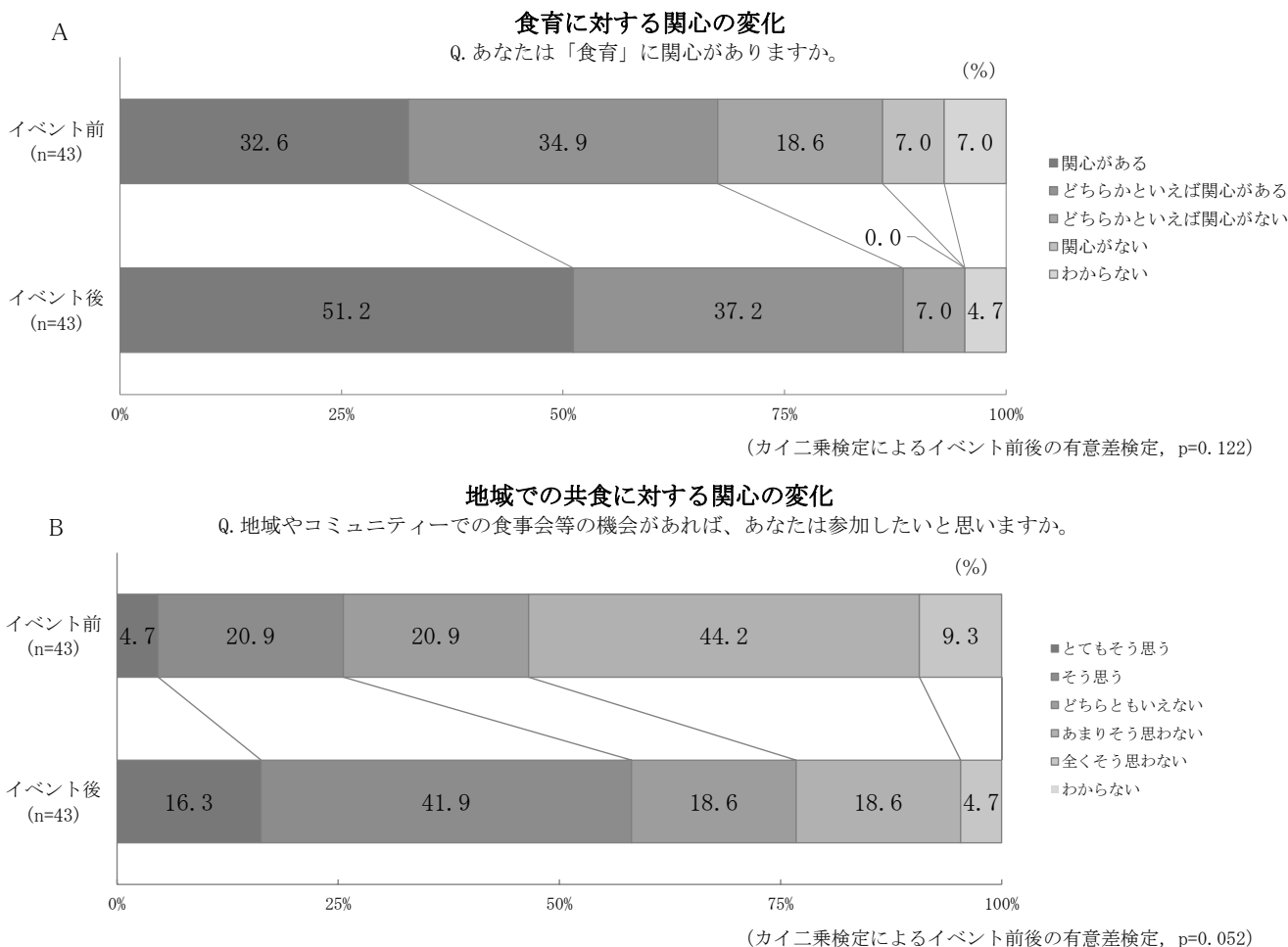


図7. イベント前後における食への関心に関する変化

IV. 考察

近年、子ども食堂は多様な活動目的で広がりを見せるものの、子ども食堂に行ったことのない保護者において、子ども食堂は生活困窮者が行くような場所という認識(ステイグマ)を持つ傾向にある⁷⁾。実際、「生活困窮家庭の子どもの食事支援」を目的として活動している子ども食堂が多いことも事実である³⁾。しかしながら、生活困窮に直結した食支援を行うことだけが子ども食堂の意義ではないと考える。電気通信大学子ども食堂は、子どもが普段出入りすることが出来ない大学の施設で、大学生・大学院生と一緒に身体を動かし、同じご飯を食べて「楽しい!」と感じたり、研究に直に触れられる仕組みとなっている。無料の学習会に来る子どもを対象とした調査では、「大学生を見たことがない」と回答する子どもがいると報告されている⁸⁾。すなわち、大学が自分にとって身近ではないことから、大学進学という選択肢を持たない子どもが存在する。そのような子どもたちを含む多くの子どもたちが、本イベントを通じて将来の新たな選択肢

を持つきっかけとなることを期待している。

実施者である大学生・大学院生にとっては、地域の子どもたちとその保護者、地元企業、市の職員、ボランティアとの関わりから、他者と自分とのつながりを振り返るきっかけとなった。また、アンケートの自由記述において、地域貢献の喜びや重要性を感じたという回答がみられ、社会・地域と自分とのつながりを再認識したことも確認できた。情報理工学系に所属する大学生・大学院生にとって、知識や技術を中心に勉強する学生時代にこのようなイベントを企画・開催することは、3つの社会人基礎力といわれている1) 前に踏み出す力(アクション)、2) 考え抜く力(シンキング)、3) チームで働く力(チームワーク)を身につける上で貴重な機会であるといえる。

イベント前後の食への関心に関する調査の結果から、実施者の大学生・大学院生は、本イベントに参加することで食育や共食に対する関心が高まることがわかった。自由記述では、「大勢で食事をする楽しさを思い出した」という意見が多かったが、「親が共働きのために共

食の機会が少なかった」などの子ども時代を振り返る記述もみられた。下宿などの理由から大人数で食事する機会が減る大学生・大学院生にとっては、共食が自分達や子ども達の食生活を豊かにする手段であることを改めて理解する機会になったのではないだろうか。また、その他の自由記述では、食べ残しに対する意見が多くみられた。単に食べ残しが多いという子どもの食事情を理解するだけでなく、その課題に対する対応策を提案する意見も含まれており、持続可能な開発目標 (SDGs) の視点での教育効果も伺えた。以上より、実施者である大学生・大学院生にとっても、本イベントが食育の必要性を感じる良いきっかけになったと考える。

今回の取り組みでは、本イベント型子ども食堂が参加した子どもたちに及ぼす影響については調査していない。今後は参加者「した子どもたち」に対する調査を行い、本イベント型子ども食堂の意義について検討し、より充実した効果の高いものにしていきたい。

謝辞及び利益相反

本イベントの開催にご協力いただいた子ども食堂かくしょうじ、電気通信大学佐藤証研究室、電気通信大学大学生協、調布市社会福祉協議会、フードバンク調布、株式会社スポルアップの皆様に深く感謝申し上げます。

本実践報告に関して、開示すべき利益相反はありません。

文献

- 1) 厚生労働省:子ども食堂の活動に関する連携・協力の推進及び子ども食堂の運営上留意すべき事項の周知について(通知).
<https://www.mhlw.go.jp/content/000306888.pdf>
(2018年6月18日)
- 2) 湯浅誠:こども食堂の過去・現在・未来(特集「孤立と排除」に立ち向かう社会貢献活動).地域福祉研究,2019;47:14-26
- 3) 農林水産省:子ども食堂と地域が連携して進める食育活動事例集.
<http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/00zentai.pdf>
(2018年3月)
- 4) 鈴木美穂,中原有麻,大河原一憲:電気通信大学こども食堂2018実施報告.
https://www.uec.ac.jp/news/announcement/2018/pdf/20181108_1-1.pdf (2018年11月8日)
- 5) FAAVO:食・運動からこども達に笑顔を!「電気通信大学 こども食堂」を開催したい!.
<https://faavo.jp/tokyochofufuchu/project/2934>

(2019年9月)

- 6) 小池温子,大河原一憲:食育イベント体験を通じた食への関心の変化に関する予備調査.第19回日本健康支援学会年次学術大会,京都(2018年3月9日)
- 7) 一般社団法人・日本老年学的評価研究機構:生活困窮世帯の子どもに対する支援ってどんな方法があるの?国内外の取り組みとその効果に関するレビューおよび調査.
<https://www.jages.net/project/konkyu/>
(2019年3月)
- 8) 渡辺由美子(著):子どもの貧困 未来へつなぐためにできること.株式会社水曜社,東京,2018: p22